様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６８０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１２１６

研究課題名（和文）体系的な対外認識育成をはかる外国史教育の内容構成に関する理論的・実践的研究

研究課題名（英文）Theoretical and Practical Research for the Contents Arrangement in Foreign History Education to Cultivate the Abroad Recognition systematically.

研究代表者
佐藤　公（SATO, Ko）

武蔵野大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０３２３２２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：対外認識育成をはかる外国史教育の内容構成のあり方について、時間的・空間的認識の統一的把握を実現する材料として「歴史地図」の活用が有益である。
「歴史地図」は、各国・諸地域の歴史的背景及び地理情報の読み取りスキル獲得に資する教材である。これは、歴史的世界像の獲得にとどまらず、現在の歴史的世界と地理的認識との関連性を同時に読み取ることを可能にする。さらに、読み取った歴史的・地理的認識の成果を活かし、情報通信機器の活用を通じて、生徒同士が対外認識を深め合う学習とその組織づくりを促進しうる教材である。この「歴史地図」の有する特質と学習成果は、日本の「世界史」教育改善に対する示唆に富むものである。

研究成果の概要（英文）：For the contents arrangement of abroad recognition in foreign history education, the use of "historical map" is beneficial as a material to achieve a unified understanding of the temporal and spatial recognition. "Historical map" is a teaching material that contribute to the acquisition of reading skills of geographic information and historical background. It is possible "Historical map" to not only acquire historical world image, but read at the same time the current relevance of the historical world and geographical recognition. In addition, taking advantage of the results of historical and geographical knowledge that has been read, through the use of information and communication equipment, "Historical map" become a teaching material that students can promote learning and organize the foreign recognition deeply with each other. Learning outcomes and qualities possessed by "historical map" is one in which suggestive for improvement the Japanese "world history" education.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教育学　社会科教育　歴史教育　地理教育　歴史地図　対外認識　外国史　世界史

１．研究開始当初の背景

日本の社会科教育学及び歴史教育学研究は、我が国の伝統と文化、郷土を愛する態度養成と共に、国際理解・国際協調の視点に立ち国際社会の平和的発展を支える資質育成を目指す教育実践の創造に取組んでいる。しかしながら、国内外において、歴史認識に関する相互理解めぐり多くの論争が絶えず燻り続けている。

このような社会情勢のもと、主に日本以外の国・地域の歴史を学習内容として扱い、対外認識の育成を通じ国際理解を進める上で外国史教育、すなわちその役割を担う中核的な教科目「世界史」教育に課せられた役割は、ますます大きなものとなっている。そして、対外認識を育成する我が国の外国史教育のあり方が、地理学及び地図作成学の成果と連携することで、時間的・空間的に統一された「世界像」の認識を促進し、外国史教育をより一層充実させることとなる。その条件を探究する上で、歴史教育史及び歴史教育に関する国際比較研究を通じて明らかにしてきた学術研究と教授活動・教材との関係を援用しこれまで考察を重ねてきた。

具体的には、第一に、戦前期日本の外国史教育において、「東洋史」の扱いに着目しつつ、「世界史」教育成立の基底を探る、歴史学説史研究成果との関連に基づく考察である。当時の、「東洋」「西洋」の二分法から脱却し「世界」を一体のものとしてとらえようとした対外認識に基づく外国史教育が、政治体制の成立と変遷を捉えたいわゆる国家史ではなく、新しい歴史像の構築とそれに関わる論争を展開していた当時の歴史学説研究との関係性に基づき成立していた。

第二に、ドイツおよびアメリカを事例とした国際比較を通じた、対外認識の育成方策の関連性や相違に関する考察である。歴史教科書の検討を通じて得られたドイツ歴史教育の現状とは、伝統的歴史学へのアンチテーゼであり新しい歴史研究の潮流であった「社会史」研究が有する考察対象や視点を、学習のための手法として多様に取り入れ、歴史認識・歴史的思考力を培う歴史教育の場に生かすことを目指すものであった。一方、アメリカの通史学習では、その建国の歴史に由来する歴史的・文化的多様性を有する社会的背景により、現在の多文化社会に対する認識とそのルーツとしての歴史、そして身近な地域から州・連邦と拡大する同心円的な視野の拡大をもたらす社会認識教育が行われている。そのため、政治的な動向を中心とした建国史と合わせて、文化的ルーツを探る社会史的な学習を取り入れており、この点においてドイツとの共通性を見出すことができる。それゆえ、異なる教育制度を持つ両国だが、その共有すべき方針に目を向けつつ、日本というさらに異なる社会、そして教育への示唆も得られるものと考える。

２．研究の目的

本研究は、国家・社会の形成者としての資質育成をはかる社会科教育に対する現代的要請に応えるため、対外認識育成を体系的にはかる外国史教育の内容構成のあり方を理論的、実践的に明らかにする研究である。

特に、外国史教育を通じた時間的・空間的認識の統一的把握の実現に必要となる、体系的な対外認識育成のための視点や手順、技能を解明する。そして、この理論的・実践的な探究の成果として期待される、歴史地図学習を通じて育成される時間的・空間的認識の統一的把握によって、新時代の国家・社会の形成者となる児童生徒の資質育成をはかるための、よりよい外国史教育の学習内容の選択と排列に関する内容構成原理、そして原理から具体化される実践像を追究するための知見を提供することを目指す。

具体的には、学習者の主体的な対外認識の獲得と促進に資する教材として、「歴史地図（Historical Map)」活用に必要となる視点や手順・技能を明らかにする。そして、収集・検討した「歴史地図」を日本の「世界史」教育で活用するための選択と排列を行い、歴史教育課程の運営に関する理論と実践として機能させる。

つまり本研究は、社会科教育学・歴史教育学を基盤に、歴史学・地理学を事例として、多様な学問体系との連携が必要とされている社会諸教科の実践モデルとして、グローバル化が進む新時代の課題である多文化共生社会を支える学力や資質育成を担いうる、新たな学習内容体系の構築とそれを支える方法や教材開発を促す原理に関する知見を切り開くものである。

３．研究の方法

本研究では、上記目的を達成するため、地域性（日本とドイツ、アメリカ）と学術研究分野（歴史学と地理学・地図作成学）という二つの比較対照の視点を設定し、外国史教育実践とその学習内容に関する体系構築に向けた考察を、横断的に実施する構造を有する。すなわち、地図作成学の成果を援用し、時間的・空間的認識の統一的把握に資するメディアとしての「歴史地図」活用の要件やその教材性を、ドイツ・アメリカの歴史教授実践との比較を通して検討する。そして、日本での「世界史」学習における通史的「歴史地図」活用実践の構築を行う。

以上の本研究の課題解決に向けた方法を大きく整理すれば、以下の三点となる。

(1)地図作成学（Cartography）と「歴史地図」活用要件の関連と活用可能性の解明。及び、地理学説史研究及び地図作成学の成果の整理と、歴史地図読解に必要なスキルの抽出。

(2)ドイツ・アメリカの歴史教育及び地理教

育教材にみる「歴史地図」と活用方法の整理分類に基づく、時間的・空間的認識の統一的把握に資する「歴史地図」の選択と排列に必要な用件の明確化。
(3)時間的・空間的認識の統一的把握に資する「歴史地図」の教材としての性質を踏まえ、日本での外国史教育における通史的「歴史地図」活用実践の創造。すなわち、地域性と時代区分に基づく「歴史地図」の選択と排列、そして日本での外国史教育＝「世界史」学習における体系的な対外認識育成と、実施方策の体系化による実践構築に向けた要件の明確化。

これら活動に支えられた方法的特色および独創的な点は、以下の三点に整理される。
①時間的・空間的認識の統一的把握を地図作成学に関する学説研究並びに知見の、歴史教育学研究への導入の仕方・特色を解明する点にある。本研究の基盤は、「世界史」という日本独自の歴史教育内容領域に関するものであり、かつ国家の政策による影響を受けやすい歴史教育固有の性格から、国際的には類を見ないものである。また、国内的には、地理学・地理教育学と歴史教育学分野とは連携が求められているものの、学問的背景や学術的追究の目的や手法が大きく異なるため、それらを結びつけるという視点や教材の検討は十分に行われていない現状にある。
②時間的・空間的認識の統一的把握を外国史学習で実現するための具体的方途を示しうる点にある。現行学習指導要領において、各学校段階における社会諸教科は「地理的内容」と「歴史的内容」の相互関連に留意した指導を行うことが一層強調されている。体系的な「歴史地図」の活用により、単に限定的な時代や文化圏における単独な事象としてではなく、通史的かつ空間を横断した対外認識を強化・促進しうる。
③一次資料としての「歴史地図」の特徴を生かし、メディアリテラシーの活用と、それら発見や調査の結果をもとにした言語活動の促進と充実を外国史教育全体で図る点にある。社会諸教科に限らず、習得した知識を活用し、それをもとに探究する活動を導くための指導計画作成及び内容の取扱いの工夫が強く求められている。「歴史地図」というメディアから直接地理的・歴史的情報を読み取る活動からは、成果を介して生徒同士が知識を深め合う学習組織づくりを促進しうる。

なお、ドイツ・アメリカの比較という手法は、各国の教育事情の相違による制約を受けるものではない。社会諸教科という歴史的・地理的認識に関わる内容領域、さらにはむしろ地理と歴史という異なる学問領域の成果を結びつけ相互に共有・享受するものであることから、学校教育の教科目と周辺科学との関係性について概念モデルを提示するものでもある。

４．研究成果

研究成果を目的及び方法に即して整理すれば、以下の三点となる。
(1)地図作成学と「歴史地図」活用要件について、現在の正確な地図上に、歴史的事情を反映していく作業的な手法と、当時の地図標記の上に歴史的事象を読み取る解釈的な手法と、大きく二つに分けられている。特にドイツ歴史教育における教材としての歴史地図は、現在の地理的な位置関係の上に過去の歴史的社会の関係性を反映した地図（Geschichtskarten）が主流であり、過去の政治的・社会的観点を反映した過去の地図（Historische Karten）はほとんど使用されていない。加えて、「歴史地図＝Geschichtskarten」の使用状況と活用可能性の観点から分析した具体的活用方法については、生徒の発達段階（年齢）と対応させつつ、「地図の性質に関する専門知識」「地図の読み取りに関する方法論的スキル」「地図学習導入のためのスキル」といった、授業時における生徒の具体的な活動や身に付けるべき能力、技能が体系的に提示されている。

さらに、現代的な課題として情報通信機器の活用（ICT, Information and Communication Technology）、特に地理情報システム（GIS, Geographical Information System）として公開された情報ソースの使用、及び調査学習ツールとしてのタブレット型 PC 等モバイル情報端末の普及への対応といった観点から、個々の学習者の活動を引き出し、かつ考察を促す学習活動の組織に向け、新しい試みが必要とされている。
(2)「歴史地図」と活用方法の整理分類に基づく、時間的・空間的認識の統一的把握に資する「歴史地図」の選択と排列に必要な要件の明確化については、ドイツ・アメリカの歴史教育及び地理教育教材には異なる方向性がみられた。

学習活動を支える教科書や教材の現状から読み取れた方向性とは、ドイツではタブレット PC のような個別学習促進のためのツールは比較的導入されておらず、パソコン・プロジェクター・ホワイトボードの組み合わせで歴史と地理が融合した学習を実現するなど、高価な電子黒板に頼らない工夫を凝らした教具・教材が用いられていた。一方アメリカでは、過去の社会で用いられた歴史地図そのものを使用する歴史学習・地理学習の教材自体は少ないが、テーマ史毎にまとめられた一次資料（Primary Source）としての歴史地図を用いた教材や学習キットは数多く作成されていた。それらの教材を用い、時間軸と空間軸を統一的に把握するための読図の観点やスキル、さらには調査活動や対話といった理解を促進・深化させるための言語活動を促進するプログラムが構想されている。外国史に関する学習内容の選択・排列の見直しと、その再構築の観点として、メディアとしての「歴史地図」を通史学習で体系的な活用を図

ることで、歴史学習活動の深化を組織的な言語活動やメディアリテラシーの活用を通して促進し、一層充実した実践方策の検討が進められている。また、国会図書館（Library of Congress）アーカイブの整備により、無料かつオンラインでの材料提供も充実しており、生徒が直接歴史資料に触れつつ調査考察する学習の重要性を強調していた。

(3) 日本での外国史教育における通史的「歴史地図」活用実践の創造に向け、歴史学習としての地図の読み取り場面における汎用性や活用可能性として、以下の五点の読み取りの必要性と、そのための活動事例が指摘されうる。

①地図の性質に関する専門知識

地理的事実として、例えば「陸」「海」「都市」「地形」「気候」といった事実について、把握することを徹底しなければならない。

②地図作成の歴史的証拠

文化的・宗教的な要素から、航海図や領土・国境変遷など政策的な要素まで、地理的事実がいつ把握されていたのか、地図の「タイトル」や表記された「記号」を歴史的証拠として読み取る姿勢やそのための知識が必要である。

③地図上に表現された歴史的状態の相違

地図に描かれた空間的広がりが、「静態地誌」「動態地誌」等、どのような状態を示すものとして描かれたのか、その表現方法とその内容の相違に着目する必要がある。

④歴史地図製作・表現形式の可能性追究のあり方とその変化

目的や用途から、宗教や美術的要素といった表現方法とその欲求、さらには印刷術の発達といった道具的発展まで、地図作成をめぐる人的・技術的発達の様子への着目が必要である。

⑤歴史的地図の作成・表現形式の定義とその歴史的相対性の認識

作図法や共通の記号作成など、地図としての活用のための作成方法の統一と、その作成方法自体の歴史的な変遷について、各時代の特徴とその相対性について考慮する必要がある。

以上が、具体的な教授場面における学習活動の設定に際し、参考とすべき点である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

①佐藤公、19 世紀第二帝政期における女子中等教育制度改革（２）―改革運動後期（1880～1902 年）、武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要　The Basis、査読無、第 4 号、2014、155-170 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　公（SATO, Ko）
武蔵野大学・教育学部・准教授
研究者番号：９０３２３２２９